武蔵野日曜聖書講筵

真人

――エレミヤ記第５章１～５節――

１９７４年３月10日
小池辰雄

真理を求むる者　義者をも悪者と倶に滅ぼしたもうや　真理と真実　何ものでもないという姿が真実　霊真　真人　超科学　無限定の世界を指し示す暗号　非言非黙　無弦の琴　図太い信仰

【エレミヤ５】

1 汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察り その街を尋ねよ 汝等もし一人の公義を行い 真理を求むる者に逢わば われ之（エルサレム）を赦すべし 2 彼らエホバは活くというとも 実は偽りて誓うなり 3 エホバよ 汝の目は誠実を顧 みるにあらずや 汝彼らを撻てどもかれら痛苦をおぼえず 彼等を滅せどもかれら懲治をうけず 其面を磐よりも硬くして帰ることを拒めり 4 故に我いいけるは 此輩は惟いやしき愚なる者なれば エホバの途と其神の鞫を知らざるなり 5 われ貴人にゆきて之に語らん かれらはエホバの途とその神の鞫を知るなり 然るに彼らも皆軛を折り縛を断てり

●真理を求むる者

今日は、エレミヤの第５章、非常に著しいところなので、たくさんは読めない。それで１節から５節までです。

1 汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察り その街を尋ねよ 汝等もし一人の公義を行い 真理を求むる者に逢わば われ之（エルサレム）を赦すべし

非常に力強いですね。これは神さまの言葉ですが、聖書の中で極めて著しい言葉の一つだと思う。

2 彼らエホバは活くというとも 実は偽りて誓うなり 3 エホバよ 汝の目は誠実を顧みるにあらずや

そこからがエレミヤの言葉です。

汝彼らを撻てどもかれら痛苦をおぼえず 彼等を滅せどもかれら懲治をうけず 其面を磐よりも硬くして帰ることを拒めり

エホバに立ち帰ることを否んだ。

故に我いいけるは 此輩は惟いやしき愚なる者なれば エホバの途と其神の 鞫
を知らざるなり 5われ貴人にゆきて之に語らん かれらはエホバの途とその
神の鞫を知るなり 然るに彼らも皆軛を折り縛を断てり

要するに、庶民に対して、庶民も神さまを受けなければ、また階級の上の人たち、支配者階級の者たちも結局、神の言葉を受けない。

「どっちもダメだ」

というわけで、エレミヤが嘆いている。そこで、

「1汝等エルサレムの邑を走り回り、しかしてその広場にて見、知りかつ尋ねよ」

「しっかり見よ、非常によく見なさい。よく認識しなさい。また、しっかりと尋ねろ」と。しっかりと尋ねて見よ。見て、よく認識して、尋ねてみる。

「汝等もし一人の公義を行い」

「公義」は「さばき」という字と同じ字ですが、「公平」という字ですね。「ただしきこと」「ミシュパーツ」を行い、そして

「真理を求むる者に逢ったならば」

「真理」という字は「エムナー」という字で、「アーメン」という字と同じ語幹の字です。「エメツ」とか、「エムナー」といいます。この場合は、「エムナー」という言葉が使ってある。語幹は「アレフ」と「メーム」と「ヌーン」ですから。これが「アーメン」という字です。

「真理を求める者がたった一人でもいるならば、それを求める者がたった一人
でもあるならば、エルサレムを赦す」

という。非常に強い言葉です。「観察する」という字ですから、「求める」という字は。「求める者」という名詞的な言い方です。「求める者があるならば」と。

●義者をも悪者と倶に滅ぼしたもうや

このところを読むと、すぐ思い出すのは創世記18章です。アブラハムが神さまと問答するところ。18章22節から、

「22其人々其処より身を旋してソドムに赴むけり アブラハムは尚エホバのまえ
に立てり 23アブラハム近よりて言いけるは 爾は義者をも悪者と倶に滅ぼ
したもうや

即ち、ソドムとゴモラが審きを受けようとするが、

「そこに義人もいるはずですが、その悪人と一緒に滅ぼすのですか」

と。

24若邑の中に五十人の義者あるも汝尚お其処を滅ぼし其中の五十人の義者
のためにこれを恕したまわざるや 25なんじ斯の如く為して義者と悪者と倶に
殺すが如きは是あるまじき事なり 又義者と悪者を均等するが如きもある

まじき事なり 天下を鞫く者は
即ちさっきの「公義を行う」というのは、このあとの「公義を行う」というのと同じ言葉です。
公義を行う可にあらずや
「天下を鞫く者、即ち神さまがその善と悪とをはっきり区別するのが、ただしく行うことではありませんか。それなのに、一緒に滅ぼしていいんですか」
というわけです。
26**エホバ言いたまいけるは 我若ソドムに於て邑の中に五十人の義 者を看ば**
其人々のために其処を 尽く恕さん
「尽く恕す」のだから悪人をゆるす。義人の故にです。贖いの角度です。
「27**アブラハム応えていいけるは 我は塵と灰なれども**
あなたの前に立てるような人間ではありませんけれども、
敢て我主に言上す
やはり問答において――傲然としたような言い方をするのが大方ですが――そうではない。同じ問答にしても、神さまとの問答はどこまでも平伏しの角度からで、アブラハムの態度は非常にいいわけです。
「塵と灰なれども敢て我主に言上す」
という。まぁ大学紛争で、造反学生が先生方と問答するのに、「てめ～」だなんて言ってみたり、「お前は」なんて言ってみたり、これはとんでもない話です。だから、私は答えなかった。
「そういうものの言い方には私は答えない」
と、ほとんど10時間私は黙っていた。
〔註：小池教授が勤務していた獨協大学でも１９７０年頃に学生紛争が起きた。当時学生部長であった小池は団体交渉の矢面に立ち大学講堂の壇上に長時間カンヅメになったことがあったという〕
8**若五十人の義者の中五人欠けたらんに爾五人の欠けたるために邑を 尽く滅**
ぼしたもうや エホバ言いたまいけるは 我若彼処に四十五人を看ば滅さざる
べし
だんだん問答していくうちに、四十人になり、三十人になり、二十人になり、そしてとうとう十人までいった。
32**アブラハム言う 請うわが主怒らずして今一度言わしめたまえ 若かしこに十**
人看えなば如何 エホバ言いたもう 我十人のためにほろぼさじ 33**エホバ、アブ**
ラハムと言うことを終えてゆきたまえり アブラハムおのれの所にかえりぬ」
（創世記18・22～33）

と。まぁ十人でもってお終いになっています、ここは。

●真理と真実

ところが、エレミヤ記では、もし一人でも――「義人」とここでは書いてない――「真理を求める者」があったならば、

「真理を求める者が一人でもいれば、それで赦す」

という。それが非常にここのところは著しいところです。彼らはこの

「エホバは活く」

という。これは誓いの言葉です。

「エホバ活き給う。汝は活き給う。ゆえに我在り」

という。「汝活き給う、ゆえに我生く」という、「ゆえに我生く」は書いてないけれども、そういう意味です、「汝活き給う」と言うときには。そして、

「自分の言うことには、生けるあなたの前に偽りは言わない」

というのがそういう誓いの気持ですから。

[2]彼らエホバは活くというとも 実は偽りて誓うなり

まことは本当は偽って誓っているのであって、彼らのは口先ばっかりだと。

[3]エホバよ 汝の目は誠実を顧みるにあらずや

ここにも「誠実」という字がありますが、これは同じ字が書いてある。

「真理を求める」

という言葉と、

「誠実を顧みるにあらずや」

と。だから、訳はこっちの方は「誠実」とか「真実」とかいう。ドイツ語でいうと前の方が、

「ヴァールハイト」(Wahrheit)「真理」

で、後の方は

「ヴァールハフティッヒカイト」(Wahrhaftigkeit)「真実」

という。真理を「ハフト」(haft)というのは「持つ」という字で、「ヴァール」(Wahr 真理)を「ハーベン」(haben 持つ)する。そういった性格、性質であることが「真実」です。

まぁ「真実」というと、私はすぐ藤井先生を思い出すけれども。

「信仰は、『信仰、信仰』なんていったって、真実がなかったらダメだ」

と。そういうわけで、藤井先生が非常にこの「真実」と言われたら、あと今度は、無教会の人たちは、ことに矢内原先生なんてのは、藤井先生のをあれにしてね――まぁ人のことを言う必要ないけれども――伊藤祐之さんなんてのは、しょっちゅうこの「真実」を言っていた。私は先生の直弟子だから、却って言わなかった。

真理と真実。即ち、客観的な真理と主観的な真実とを、

「誠実（まこと）を顧みるにあらずや」

と。真実、真心（まごころ）を顧みることになるので、

「まごころ」

といった方がなおいいかも知れません。真実は「まごころ」から発していないと。真理と真実というわけです。

レッシング〔ゴットホルト・エフライム・レッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729～1781 ドイツの詩人、劇作家、思想家、批評家。ドイツ啓蒙思想の代表的人物〕の言葉に、

「神さまは右の手に真理（ヴァールハイト）をもち、左の手に真実（ヴァールハフテッヒカイト）を持っていて、お前はどちらを選ぶかと問われたら、私は左の手の真実をいただきますと言う」

という言葉がある。人間は「ヴァールハイト」（真理）そのものはなかなか持てるものではない。「ヴァールハフテッヒカイト」（真実）なら持つべきものである。そういう気持です。

ところで、

「誠実（まこと）（真実）を顧みるにあらずや」

という。それはいいですよ。けれども今度は、その「真実」にまたこだわるから、この真実が何か硬化現象を起こす。そこで、私はこの真実という言葉が少し危険だと思う。本当の意味では、「真実」でいいですよ。真実、真心（まごころ）は決して悪いことではない。大変結構なことです。ところが、この真実というと、

「あいつはどうも真実がない」

と――真実の反対は不真実――そういって人をややもすると審きたがることになる。そこで、私はこの「真実」という言葉をむしろ避けたいわけです。

それでは、「真実」とはどういうことかというと、まぁ非常にひらったい言葉でいうと、

「あるがまま」

ということです。外側も内側も「あるがまま」という、飾りのない、分裂のない、未分の世界、全的である。もうひとつ別な言葉でいうと、

「全的」

ということです。全的というのはそういうことなんです。何か自分の中でいろんなものが分裂していない。いろんなものはあったっていいですよ、仕方がない。けれども、それをあるがままに、プラスもマイナスも全部あるがままに、全的にそこに投げ出す。「ズブイェクト」（Subjecto）という言葉は「下に投げる」ということ。

「そこへ投げ出す」

それが

「実存」「ズブイェクティヴィスムス」（Subjektivismus）

という。キルケゴールが言った言葉です。だから、

「投我」
我を投げる。投我の体勢。
「あるがままにそこに自分を神さまの前に投げ出す」
それが「真実」、別な言葉でいうと
「砕け」
だ。破れたままでいい。
「破れたままでそこに出す」
ことが即ち砕けである。また別な言葉でいうと
「平伏し」
です。何といってもいいですが。言葉というものは、表現すると何かひとつの限定が出てくるから困る。

●何ものでもないという姿が真実

こういうお話がある。斉の桓公〔紀元前696～628年〕という殿様がいた。まだ戦国時代のときにたくさんの国がある。その桓公が宮殿でバルコニーみたいな所で本を読んでいた。そしたら、その下にいた大工、輪偏という大工が車を造っている。
「お殿様、あなたは何をお読みですか？」
「自分は昔の聖人の書を読んでいる」
「ああ、そうでございますか。昔の聖人の書をお読みのことだそうですが、それでは要するに聖人の糟粕を舐めていらっしゃるようなものです。それでよろしいでしょうかね。私は実は車を造っていますが、この車の造り方を教えようと思って、自分の息子にやっているが、この車の造り方のコツを伝えようがありません。」
ということ。
「いくら、説明しても伝えようがない。言葉は要するにどうにもならん」
と。私はこないだ、あの『生命の光』に書きました、
「預言者も使徒たちも、言葉がもどかしかっただろう」
と。伝えようがない。だからもう、これを見て直感してもらうよりか仕方がない。自分でまたやってもらうよりか仕方がない。それで私は結局コツコツと一人でやっているんですと。即ち、技そのものを見て、自ら技する、自らやってみる。
「自らやってみなければ、聖書もいくらいわゆる分かってもどうにもならん、これを生きなければ」
ということです。要するに、言葉は発するというと、限定される。「真実」なんてことを言って、それにこだわったらダメ。「真理」といっても、真理にこだわったらダメです。
ところで、この真理と真実。キリストは、

「我は真理なり」

と言いましたね。「私は真理を語っている」とは、キリストは言わない。「我は真理なり」と言う。「私は真理である」と、これは大きなことですよ。他の人は言えないんです、「我は真理なり」なんてことは。まぁ大変な言葉です。

「我は道なり、我は生命（いのち）なり」

という。これはいかなる哲学者も、聖人君子も、これを言えないです、キリストでなければ。大変なひとですよ、イエスというひとは。「我は真理なり」と言えたイエスは、どうであったかと――私はいつも言っているでしょ――彼は真理ではなかった、何ものでもなかった。即ち、彼は無真理である。これが

「無者」

ということです。無者に徹して、

「何ものでもない」

という人が「真理である」と言えた。そうすると、「何ものでもない」という姿が「真実」なんです。真理と真実を対照して、

「さぁどうもこれは、どうしたらよかろうか？」

なんて、真実にこだわってしまうと、それは不真実になってしまう。みんな何か分かったような顔しているけれども、本当は分かっていない。真理と真実をそういった相対的な、「客観の、主観の」なんてやっているうちは、まだ頭でものを言っているんです、本当は。

「我は真理なり」というときに、言える人は自分が本当に、この自分を無としている事態。さっきから言っているその「無」は

「あるがまま」

ということ。

「何ものでもない、この通りでござる」

といった、自分を何ものともしない、それが言い換えれば、真実なんです。だから、真理と真実は本当は相即する。真理の半面は真実です。真実の半面は真理です。「半面」というよりか「前面」といってもいい。裏表なんだ。透かしている。大変なことです。それでピタリときたから、私はもう力が来てしまった。昨日から冥想している、私は。本当に深く冥想しないと、真理はつかめないですよ、まだ理屈でもって頭でひねくっているうちは。そんなものから出た結論は大した結論ではない。自分が投げ出されてなければダメです。

●霊真

だから、キリストがヨハネ伝の４章24節で、

「神は霊なれば、霊と真理（まこと）とをもって拝せよ」

ということが、また私ははっきりわかった。「霊と真理（まこと）」という。この「まこと」は「アレ

テイヤ」という字は、ヘブライ語でいえば「エムナー」「真理」という字です。「霊と真理とをもって」「霊と真理（まこと）」といわれると、何か二つみたいな感じがしていた。「どうもどうしたらよかろうか？」なんて思う。

「霊と真理（まこと）とをもって神を拝せよ」

と、キリストは分割して謎のように仰ったけれども、本当は神の霊を、神霊をいただいていなければ、この真理は――神霊をいただくこと事態が真理でなければ――いただけない。即ちさっき言った無にならなければ。キリストは自分を神の前にぶっつぶれていたら、そしたら、神の霊がきた。

「幸いなるかな、霊の無者よ、霊の貧しき者よ。天国、神さまは汝のものである」

と。これはキリストの告白です。天国即ち霊が――霊は天国の実体です――神霊がやってきた。それは本当にぶっつぶれて、霊が貧しい時にくる。それが真実です。「真実をもって」ということは平伏して、自分を何ものともしないで、無者となって、そして神を受けとる。その「無者となる」が私たちにとっては問題だから、その

「無者となる」

ということを十字架が与えている。十字架が与えているところのこの「無者」です。十字架が与えている無者ですから、あるがままで一向に差し支えない。そういう、この

「賜りたる無」

の世界が真実でありますから、そうしたら、

「霊と真理（まこと）とをもってせよ」

ということは、

「霊真をもってせよ」

と。もうひとついうならば、

「霊然自然をもってせよ」

と。我々のあるがままの姿が自然です。

「自然法爾（じねんほうに）」

という言葉が仏教の方にもある。いつか書いたね、「自然霊然」と。私の書いたものを、

「ああ、先生はまた書いたか」

なんて、それでお終いではダメですよ、皆さん。やはり「ハレルヤ」誌を喰らってくれなければ。「ハレルヤ」を時々読んで、クシャクシャになって破れるくらいに――私は自分を何か言っているのではない――そこに盛られている真理を生きてくださいということ。「これを読め」といって、人に読ませてください。

あなた方はまだ積極性が足りない。もっと本当に投げ出して行かなければダメです、どういう時にも本当に恐れなく真理を語れなくては。人はそれで動くんです。絶対に恐れる

ことはない。それは御霊の権威だもの。

「自分がどうか」

なんてことではない。ぶっつぶれているんだもの。私みたいなしょうがないやつだから、なおさらいいんだ。自分が少し立派だというと、その立派さが惜しくてしょうがない。そんなものはないんです、私には。

「**霊と真理（まこと）とをもって拝する**」

ということは、そのような「霊真」になっている。霊的真実だよ。「霊真」といったってかまわない。

●真人

だから、私は題に

「真人」

と書いた。その真理と真実とが一つになっている、この真人。即ち真理を求めている人がこの真人です。「真理を求めている者」ということは、

「神の霊を、キリストの霊を呼び求めている者」

これは本願の声がきている。呼び求めの奥には本願の声がきて、「きたれ、きたれ」と言っている。

「来（きた）れ来れといっているその声に応ずる者は」

ということなんだよ、「求めている者は」とは。何もないものを求めてはしないんだ。向こうからはっきりと、

「きたれ！」

と言っているんだから、

「はい、行きます！」

といって、そこに進んで行くのがこの「求める」です。「求める」というのは「吸いつけられる」ということだ、言い換えれば。

神さまは霊者である、聖者である、真者である、真なる者である。それを求めるものを「真人」という。そういう真人が一人でもいれば、また私の言葉でいえば、

「無者が一人いれば」

でもいい。

「本当の無者が一人でもいれば、これは全部赦してやる」

と。凄いではないですか。それだけの使命をあなた方一人びとりが負っているんですよ。

「大東京に何人いようとも、ここに無者あり。その故に神は赦し給う」

と。それだけの驚くべき原始力的な自信をもってください。「原始力」というのは始めの力だよ、ウルクラフト（Urkraft）だ。

そういうのが我々クリスチャンです。目が輝かざるをえない。身体はもの凄いエネルギーに満たざるを得ない。相手が二千人いようが、三千人いようが、圧倒せざるを得ない。そうですよ、恐いものはないんだもの。私は皆さんとこんな小さな集会をしているけれども、一万人を相手にしているのと同じことだ。自分のことを言うのでも何でもない。手島君が「やってくれ」といえば、私は「はい、やります」と、なぜはっきりとすぐ言えるかというと、それだけのものが私に来ているから言えるんです。「これは大変だな」なんて思いやしないんだ、僕は。だから、手島君の連中があの「生命の光」２月号を読んで、

「感激している手紙がよく舞い込んできます」

と、こないだあの編集の人が言ってきました。それで、

「夏の７月にはまた伊豆の伊東で大集会をしますから、ぜひ先生、来てください。専門の伝道者が40人、それから各支部の家庭集会の人たちがあと百何十人、合わせて二百人いますから。それは前の日にそれだけ集めますから、それに一席やってください」

と、こう来ているんですよ、既に。私はやってあげますよ。手島さんが天界に行ったら、却って彼らは勢いよく、もう今は会員が増えつつあるということです。これは聖霊の世界です、本当に。御霊を口で「聖霊」なんて言っているのではないから。

私は無教会でも何でもないよ。あそこに「無教会の驍将（ぎょうしょう）」〔強く勇ましい大将〕なんて書いてくれたけれども、「無教会の驍将」でも何でもない。私はキリストの一兵卒ですから。

「無教会はヘタすると英雄主義になるからいかん」

と私は言っている。

「信仰のヒーロー（英雄）だ」

なんてことをあのブルンナーが言ったから、私は

「それはダメです。いわゆる英雄主義ではありません。御霊の世界は本当に一人びとりが一兵卒でいいんです」

と、あの時にも言った。そういうわけなので、皆さんはこの集会に来ていてモサモサしていたのでは、神さまに申し訳ないですよ。もの凄い、また祈りの世界の力というものがある。

●超科学

こないだの念波とか念力にはおそれいったね。私は残念ながらそれは見なかったが、その前のテレビでは見た。家の息子が言うのに、本当に時計が止まっているのに動きだしたそうだ。それから、お匙が曲がってしまったり。大変なもんだね、あれはカナダからだ。〔註：ユリ・ゲラーは１９７４年を皮切りに、公式・非公式に何度か来日。当時の人気番組『11PM』や『木曜スペシャル』(日本テレビ)に登場。スプーン曲げやテレビの画面を通じて念力を送ることで、止まっていた時計を動かすといったパフォーマンスで日本での超能力ブームの火付け役となった（ウィキ

ペディアより）」。いやもうそれは時間空間を超越した世界です、超科学の世界だから。それだけのものが人間の心の中には宿る。それはスウエーデンボルグ〔註：Emanuel Swedenborg（1688～1772年）はスウェーデン王国出身の科学者・神学者・思想家。生きながら霊界を見て来たと言う霊的体験に基づく大量の著述で知られている〕もその世界に入っている。力の世界でもそれは現象する世界です。

その点で、ダメならばダメなほどいいんですよ。

「私はダメだ」

なんて、決め込む必要はひとつもない。昨日の卒業式も私は生徒に言ってやったんだ、

「君たちは一人びとり天下一品だ。できるの出来ないの、頭がいいのわるいのと、そんなことを思うな。私自身が大学に入るときに一浪した。今卒業しても、まだ一年間やらなければならないのがこの中には幾人もいるだろう。喜べ、喜べ」

と――「喜べ」とは言わなかったけれども――

「大丈夫だ、安心しろ。すぐ大学へ行かなくたっていいんだ。その代わりその一年間を本当に有効に過ごしてみろ。あと楽しくなるから。私自身がその体験からものを言うんだから」

と言ってやった。何だって遠慮しないで言いますよ、私は。本当だもの。体裁ぶったような卒業式、いわゆる式みたいなのがたくさんあるらしいな。

私は傲慢なやつは徹底的にやっつける。ここのエレミヤもそうだもの。

「かれら懲治（いましめ）をうけず 其面（かお）を磐（いわ）よりも硬（かた）くして帰ることを拒（いな）めり」

という。とんでもない。これはサタンの角度です。その次のところにも獅子が出てくる。

●無限定の世界を指し示す暗号

真理、真実を、このキリストの霊をいただこうと、その御霊を求めている本当に飢え渇いている、そういう者があるならば、必ずそこには本願の劫力がやって来る。必ずそれをして町を本当に赦してやるという。素晴らしいことですね。私たちの存在がそれだけの使命と力を課せられているということです。エレミヤのこういう言葉は、言葉じゃないです。

「真」といえば反対は「偽」だね、偽り。だけれども、そういった意味において、ただ相対的にものを言っているのではない。言葉は、発すればどうしても限定は受けるけれども――いいですか、そこを間違えないでくださいよ――言葉は限定をするけれども、しかしながら、言葉の真意は無限定の世界を指し示している暗号、シンボルであります。

「すべて過ぎ行くものは象徴である」（Alles Vergengliche ist nur ein Gleichnis.）

とゲーテが言ったが、この過ぎ行くもの一切これは象徴である。しかしながら、過ぎ行くものの中に過ぎ行かざるものを見ていかなくてはいかん。限定された言葉の奥に無限定なものを見ていかなくてはいかん。でなければ、

「沈黙は金なり、雄弁は銀なり」

と、黙り込んでしまってどうにもならん。「沈黙は金なり、雄弁は銀なり」ということは、

「言葉では表現できないから遂に絶言絶慮である」

という意味において勿論、真理です。けれどもまた、沈黙ということにこだわったらまたダメなんだ。だから、語るも語らざるも自由自在なところ、いつもそこにおいて無限無量なるものを受けとっていく。指し示しているから、それを今度は受けとっていかなければね。すぐに体受する、身体に。でなければ、聖書の言葉を儀文にしてしまう。

「御霊は活かし、儀文は殺す」

とパウロがなぜ言ったかというと、「聖書にこうあるから」といって、御言を一生懸命で拳々服膺しようと思って、

「この御言の意味はどうだこうだ。果たしてこう言っただろうか？　これは過去でなかった、未来だ」

とか、そんな下らないことを言っていたらしょうがない。いわゆる学的良心は結構だけれども、それは結局、相対性にすぎない。「ギリシア語やヘブライ語を勉強しなさるな」なんて私は言っているのではない。あなた方は大いに勉強してください。しかし、

「ギリシア語やヘブライ語が出来ないと聖書は分からない、というのはとんでもない思い上がりだ。その奥を行け」

と。それを言ったものだから、手島さんのところでは一生懸命でギリシア語やヘブライ語をやっているものだから、彼らはちょっと戸惑ったかもしれないね（笑）。「大胆なことを言うなぁ」と思ったかもしれない。しかし、真意はわかってくれるだろう。

大体、日本でもって一番先にヘブライ語のクラスをもったのは僕なんだから。塚本先生のところで三年間やった。けれども、そんなことにこだわるのではない。破れた誤訳だらけの日本語で結構だ。その奥が読めるかということだ、問題は。

●非言非黙

自然・霊然の世界に入る。そうすると、もう真実も真理も一つである。

「霊と真理（まこと）とをもって祈れ」

ということも、これも一つに受けとる。一に受けとる。

「まず、霊と真理（まこと）はどういうことで……」

なんて、分析したってどうにもならん。霊を、御霊を、真理を追い求める姿が「まこと」なんだから。

「自分ではないぞ」

という姿が「まこと」なんだから。

「己を憎まずばわが弟子となることができない」

という、「まこと」なんだから。キリストの言葉は烈しいですよ。

それで要するに、私たちにとっては、この「真理」はキリストです。そして、

「言葉にあらず、沈黙にあらず」

というね。

「非言非黙」

という言葉がある。言うのでもなければ、黙すのでもない。ではどうしたらいいか。人間は、言うか黙すかのどちらかなのに、言うのでもなければ黙すのでもないとは。「非言非黙」という言葉は、

「言ってかまわないよ、黙っていいよ。しかし、言うということ、黙るということにこだわらないところの世界」

が「非言非黙」という世界なんです。ある時は沈黙せよ、ある時は語れ。しかし、それは相対的な語るでも、相対的な沈黙でもない。わかりますね。そういった自在な世界に入ってくる。そうしたら、聖書はもはや儀文にはしないです。本当に眼光紙背に徹してくる。

「この言葉はこういう意味でござい」

なんて、カトリックでは決め込んでしまって、

「勝手な読み方をするな」

なんていうのはとんでもない。勝手ではないんだよ。本当の天然自在の霊言の読み方ができるためには、

「こう読まなければならない」

なんてことはない。昨日はこう読んだけれども、今日読むと中味が違ってくるのが本当なんです。奥では一つなんですよ、違ってくるといったって、奥では。その時その時に実存的な読み方というものは違ってくる。それでいいんです。

だから、私は、皆さんが録音して一生懸命で書いてくださる――有り難いですね――けれども、今度は自分で筆にするとまた違ってきてしまう。

「先生はこんなことは言わないのに」

なんて。やっているうちに逆ってくるからしょうがないじゃないですか。そういうのが、無限無量の真理の世界です。聖書はまだ語り切れないで困っているんです、この聖書というのは。それを、「聖書には在るの無いの」と下らないことを言っている。本当にその奥を見ていれば、その特殊なる面から無限無量なるものが現れてきて、それが全体として渾然と大きなハーモニーをなす。

そういう消息をやはり大きくつかまえていたのがゲーテです。昨日も言ってやったんだ。

「ドイツ語の連中はゲーテをしっかり読め。英語の連中はシェークスピアをしっかり読め。下らないものを読むな。そこにはもう無限の真理が含まれているから、第一流のものを読め」

と。ただゲーテやシェークスピアに限っているわけではないけれども。そういう第一流のものには、実はシェークスピアにしろゲーテにしろ、源泉がある。それはこの聖書です。

●無弦の琴

陶淵明（365～427年）という人がいるね。哲人であり詩人である。しかし彼はなかなか趣味があった。琴です。琴が非常に好きだった。ところが、琴も最後の世界はどうだろう。無弦の琴。弦の無い琴。琴の曲を聞くね、ああいいなぁと。けれども結局、弦の無い琴をじっと眺めて、そこから無限の響きを聞く。無弦の琴を見ていると無限の響きがそこから湧いてくる。それを霊の耳で聞いているのが一番楽しいという。素晴らしいね。宮本武蔵も剣をぬかない武蔵が一番本当なんだ。名刀はなかなか抜かない。抜かない、鞘は払わないで納めている、そのところに限りない剣の使いが含まれている。

何でも、あなた方はやることに、そういった境地がだんだん自分の身についてくる。看護婦さんは、

「病人を看ていると病人が治ってしまう」

なんてなことになる。これはお医者さん以上ですよ、これが本当の看護だ。ぜひそうなってもらいたい。

本当は、先生が何かものを言っていたらダメなんだ。「率先垂範」という言葉が昔からあった。身をもって範を垂れる。まず自ら身をもって範を垂れる。無言の行です。自分でやっていく。生徒に「こうしろ」なんて言わなくも、掃除を自分で始めていく。そうすると、「先生に掃除をさせてはわるい」といって生徒は始める。なんていうような呼吸です、要するに。

まぁ学校でもタバコを先生はみんな吸っているよね。そして生徒には、「お前はタバコを吸うな」なんてやっているわけだ。まだ二十歳にならないからと。それはそれでいいんだよ、法律だから。けれども、やっぱり先生は〔吸わない方がいい〕。教官室に生徒はやってくるよね、先生はふかしているものね。まぁ私は吸わないけれども、吸えないんだ私は大体、煙ったくて（笑）。吸おうともしない。

即ち、

「『初めに言あり』ではなくて、『初めに行あり』」

とゲーテが言った。やはりゲーテは大事な真理をつかんでいる。「初めに言あり」ではなかった。初めに行為あり。行為が人を動かす。愛の行為が最高の行為です。人を荷う、自ら黙って人を荷う、この行為が人を動かすわけでありまして、

「聖書は言葉にして言葉にあらず」

と言わなくてはいかん。「みことば、みことば」なんてさんざん言って、「みことば社」なんてあるけれども、「みわざ社」といった方がいいんだよ。

聖書は言葉ではなかった。活言、全く活ける言葉です。言行一如という。彼らのは全部

行為なんだ。行為を表すのに言葉よりか仕方がないから、言葉で表しているだけのはなし。

「聖書は実はドラマである」

というのがそのことなんだ。ドラマである。だから、このドラマの中に身を投ぜよと。言葉を分かろうとしたってダメだよ。聖書の言葉は暗号なんだ。これはドラマの暗号だから。「ジンボール」（Symbol 象徴）だ。

「言葉は真理の筌蹄（せんてい）なり」

という言葉もある。「筌（せん）」というのはお魚を捕らえる網。「蹄（てい）」は兎や何かを捕らえる罠（わな）。言葉というのはお魚を捕る網や罠みたいなもので、お魚が採れればこんなものは要らないという。真理、即ちお魚だとか兎だとかいう、実体を捕まえるまでの網だの罠にすぎないのだと。そういう面白い言葉です。言葉というのは要するに、真理への道標（みちしるべ）であるという。

●図太い信仰

そういうことも真理であるが、もうひとつ、キリストの言葉を考えてください。

「わが言（ことば）は霊なり生命（いのち）なり」

という。

「キリストの言そのものが霊であり生命である」

ということは暗号の中にもう生命が入っている。だから、「立て！」と言えば立ってしまう。「開け！」と言えば目が開いてしまう。死人が甦ってしまう。即ち、キリストの言はもはや意味ではない。同時に霊であり生命である。いわゆる言葉が言葉を超越している。言葉ならざる言葉、超言なんだ。言ならざる言。こういうわけだ。これではっきりしたね。

そういったようなわけで、我々はこの「真理」とか何とかいいましても、もはや観念的につかまえたってダメ。常に具体的な世界です。真理は、宗教の真理は常に具体的な世界です。根源においても、現象においても、具体的に動いている実体の世界です。だから、

「我を見よ！」

ということが言えるようになる。霊が化体（かたい）してくるから。そして、もうはっきりと全的になってくるから、変質変貌を起こしてくる。自分で整えようなんてしているのではない。

それだから、エレミヤが

「ただ一人の真理を慕う者があるならば」

と。キリストを求める者があるならばという。もう

「求めよ、さらば与えられているぞ」

ということだ。「与えられん」ではない。

「求めてみろ、もう与えられているではないか。尋ねてみろ、もう見出しているではないか。門を叩いてみろ、もう開いているではないか」

と。今日初めて言うよ、こんなことを。「転ばぬさきの杖」というけれども、ちゃんと来て

いる。そういう図太い信仰になってくださいよ、皆さん。

「そうなるだろうか？」

ではない。だから、私はこないだから言っているんだ、

「未来のことを『であろう』なんて言っていたらダメだ」

と。手島さんの書いたものには「であろう」がずいぶん多いんだよ。別に彼は蓋然性で言っているわけでもなかろうけれども、まぁ多少ひかえめに言っているんだろうと思うけれども。私はもっと率直なんです、そこは。

いいですね。もう楽しくてしょうがない。バカにならなければダメなんですよ。

「大バカ者でなければ本当の仕事はできない」

これも西郷南洲がどこかで言っている。「大バカ者」というのはどういうことかというと、

「単純にものを受けとれ」

ということです。

大体、こないだの念力でも、男があまりそこにいるとダメだそうだね。男というのは疑い深いから。女性がいると力になる。それは女性は単純に受けとるから。まぁ、キリストの回りにも女性がだいぶいたようですが、あれはみな単純に受けとっているからです。

しかし、私みたいな野郎は非常に単純ですから、単細胞ですから。まず疑ったことがないんだよね、このキリスト教に来てから。

「俺は信仰をそろそろ棄てようか」

なんて思ったことはない。ただ、信仰の上の、

「まだ本当の力が来ないから、どうしたろうか？」

ということは、それはあれしていましたけれどもね。

そういうわけで、「無弦の琴」というのは愉快なことだね。弦が切れている。結局、制度でも何でもないですよ。学校の制度だ、施設だ、何だと一生懸命で整えようとしている。まぁ整えたって悪くはないけれども、私はむしろあの獨協〔中学・高校〕はオンボロ学校でいいと思っている。

「オンボロの破れ学校で結構だ、その代わりお前たちは、内側はしっかりしろ」

ということ。

本当の御霊の権威のひとに皆さん、なってください。そして、恐れなく証していってください。どういう場合においても、人を救う、人を助ける面はあるんですから。

まぁそれくらいでいいでしょう。では、今日はそこまで。

聖歌546番「もゆるみたまよ」を歌いましょう。